



連載 関係からみた子どもの こころと育ち

小林 隆児 Kobayashi Ryuji 大正大学人間学部臨床心理学科教授, くじらホスピタル

頭痛で不登校状態になった男児

S男：13歳, 中学2年生。

主訴：頭が痛くて、学校に行けない。

家族背景：両親とS男の3人家族。父親は会社員で母親は専業主婦。

現病歴：ちょうど1年前の同じ時期に2カ月間、いまと同様の症状のために学校を休んだことがある。小学生時代から頭痛もちだったが、10歳(小学5年生)のころからひどくなり、中学生になってさらにひどくなってきたという。

もともとの性格は、外で仲間と遊ぶよりも、ひとりでゲームをやるのを好む。しかし友達づきあいはよくて、とくに悩みがあるわけではない。大の仲良しが5, 6人いるらしい。

面接場面での様子

筆者はS男と話をしている、本人の気分が暗く落ち込んでいる感じを受けたので、「周りの人はどう見える？」と尋ねてみた。するとS男は「周りの人間は生き生きしている感じがする」というので、「ではあなたは生き生きしていないんだね」と確認するつもりで聞くと、「いや、そうでもない。冬は生き生きしている」と返答するのであった。この返答に筆者はとても意外な感じをもった。S男のつらい思いに共感を寄せることによって、面接が深まっていくことを期待しての質問だったからである。

自分が困っていることをストレートに相手にぶつけることに対するためらいがすぐにはたらくのか、S男は自分のつらさをすぐに引っ込めてしまう。そのようなS男の態度には周囲に対する強い気遣いがうかがわれたので、「なぜ気遣うようになったと思う？」と尋ねると、「他人に迷惑をかけたらいかと母親からいつも言われるし、自分でもそう思っている。自分がどうなっても、

自分がしたことなら自業自得だから仕方ないけど、他人様に迷惑をかけたらいけない、と母親にいつも強く言われている」というのである。具体的に話を聞いていくと、次のようなことがわかってきた。

お母さんは常々、小さいことでも相手には大きく伝わるから気をつけなさいと言う。例えば、風呂からあがるとき、身体をよく拭いて、洗面器の水は捨てて斜めにかけておくように。家庭でそうしていないと、つい外でも同じようにやってしまうから、と注意するというのである。言っていることは確かに正しいけど、うるさい(と、S男は小声で不満を言っているが、母親に面と向かっては言えない)。あまりにも些細なことなので、それこそ頭が痛くなる感じがする。でも母親は「そんな些細なことが積み重なって大きくなるんだから」と僕に言うと話しながらも、咳が出そうになると、筆者から顔を背けて咳払いをするなど、実に礼儀正しい態度である。「そんなことをしていたら、学校で浮いてしまわない？」と筆者が尋ねると、学校での生活はのびのびしている、家に帰るとうるさいので母親の言うとおりにしているという。

能。正しく四這いを行う。物につかまり立ち上がり、そのまま姿勢を維持している。PCWでの歩行可能。立位と歩行に際して、つかまっている物に対して、上肢の力で姿勢を維持していたり歩行している。大腿部介助にて立位不能。股・膝・足・肩関節に、整形外科の手術を受けている。松葉杖歩行練習に入る。

2010年8月9日：松葉杖歩行4の状態、20m、25mほど歩く。途中で休まないと、下肢筋を支持できない。

*下肢筋力が弱く耐久性がないために、継続しての歩行ができない。上肢での体重を支える指導ではなく、下肢筋での体重負荷を指導されていたならば、このようにはならず特例1のように、もっと早い時期に松葉杖で歩いていたと考えられる。一般的には、「2歳までに自力でお座りができれば歩行可能、4歳までに自力でお座りができれば半歩が歩行可能、8歳までに歩行できれば以後は歩行不能」といわれているが、特例1のKRさんと特例2のYSさんはすでに8歳を過ぎており、歩行は不能であるとみなしてよいのか疑問に思う。

KRさんに会ったとき、1回のトレーニングで松葉杖を使って歩行が可能となり、不思議に思った。すでに、クラッチでの歩行を試みていたが、使用不能といわれていた。この子に会って、いままで指導してきた人の対応を思うと、疑問と不満を感じた。数年後に、YSさんと会ったときも、この子たちのリハビリテーションとよばれる指導はいったい何だったのかと、この子らの指導に当たった人に対して、疑惑と憤りを感じた。

以上、事例で紹介した子どもたちは、どの子も2歳未満で自力坐位・四這いが可能となっていたのに、実際に会ったと

きには杖歩行も独歩も不可能な状態でした。なかにはPCWでの歩行は可能だが、立位が不安定であったり不能だったのです。PCWでの歩行が、歩行可能者としてみなされるのでしょうか？この子たちは、私たちと知り合わなければ、特例の2人が歩んだ道と同じ道をたどり、杖歩行や独歩に至らなかったのだと思います。

そこで私たちは特例・事例にあげた子どもたちのトレーニングに際して、下記事項を改善することにしました。

- ①松葉杖歩行に入るとの子にも、下肢装具の不適當な箇所を改善する。
- ②SLBの足関節の可動域のないものや少ないものには、可動域を30°以上設ける。
- ③足部に変形がありながらインソールが使用されていない子どもには、インソールを付けたSLBに交換する。
- ④事例5については、インソールの付いたブーツ型装具をそのまま使用する(詳しくは、2010年2月号第6回の本連載をご覧ください)。

乳児期や幼児期に、「いずれ歩行が可能となるだろう」といわれていた子どもが、年を重ねるに従い、「思っていたよりも脳の障害が重く、歩行に結びつかないかもしれない」に変わり、ついには「歩行は無理だろう」と、指導者の発言が変わっていくのです。自分の指導能力不足を棚に上げていることに気づいてほしいものです。そして、この子たちが私たちと知り合い、杖歩行や独歩に至ったとき、「歩行ができる時期がきたのね」と発言が変わります。どの子にも、杖歩行や独歩に到達できる指導や介助器具を使用することが求められているのです。

(写真撮影：石倉麻夕)

小児看護

2010年 5 月号

医療機器使用中における
小児の看護

他人に迷惑をかけてはいけないという思いだけが強くはたつき、自分の困っていることなどを相手に話すことには強いためらいがはたらいている。これまでS男は、母親に自分の思いを無条件に受け止めてもらった体験がほとんどないのではないかと想像された。

筆者が接近するとS男は回避する

S男は両親に連れられて、筆者の所へきたにしても、自分の心のなかにつらい思いを秘めていたに違いない。1対1での面接場面でなんとか少しでも語り出すことができればと思いつつ話をすすめていた。筆者は彼の気持ちを感じ取りつつ「あなたは生き生きしていないんだね」と共感的に語りかけた。しかし、それに対してS男が見せた反応は、筆者には肩すかしを食ったような感覚を引き起こした。なぜかといえば、筆者がS男に接近した途端に、ずっと逃げられたように思えたからであった。筆者の接近が思わずS男に回避反応を誘発したのではないかとさえ感じられた。このような反応から、筆者はS男が日頃から対人関係にとっても敏感で、対人的距離のとり方にいたく神経を使っているだろうと想像したのである。

母親のしつけと「甘え」の体験

その後、面接のなかでS男がしばしば見せる“筆者に対する気遣った言動”を取り上げたところ、日頃から母親に事細かくしつけられていることを語り始めた。しつけの内容自体を取り上げてみる限り、さほど問題には思えないかもしれないが、S男がいつも母親の顔色をうかがいながら生活していることを想像すると、しつけられる以前はどのような親子関係であったのかが気になった。なぜなら、しつけの時期は「甘え」の時期を体験した後に初め

て訪れるはずのものだからである。

「甘え」の体験はアンビバレンスを生みやすい

乳幼児は、養育者に絶対的に依存しなければ生きていけない存在である。そうであるがゆえに、この時期「甘え」が享受されるか否かは彼らにとっては死活問題である。しかし、彼らの甘えや欲求を受け取る側の養育者は、いついかなるときも子どもの欲求に応えられるかといえば、けっしてそうではない。養育者はさまざまな事情や歴史を抱える存在であることから、時には自分たちの都合で拒否したり、無視したり、さらには殴打したりすることさえ起こりかねないのである。そのため、子どもたちはどうすれば自分たちの欲求が叶えられるか、さまざまな反応を見せる。親の顔色をうかがい、どう振る舞ったらよいか懸命に考えながら行動しているのである。「甘え」が享受されるためにはどうしても相手が必要であるが、それは相手しだいなのである。「甘え」がアンビバレンスを生みやすいのはそのためである。

「甘え」を無条件で受け止めることの大切さ

この時期の「甘え」の体験が決定的に重要なのは、自分という全存在が無条件に肯定的に受け止められることによって、子どもたちは自分に対して肯定的な感情をもつことができ、親に対しても基本的信頼感というゆるぎない信頼を寄せるようになる。もしもそれがさまざまな事情によって、「甘え」が十分に享受されなかったとすれば、子どもたちの心にどのような思いが蓄積していくか、われわれはもっと真剣に考える必要がある。先に述べたように、S男が自分のつらさを他者に語ることに強いためらいをもっていた背景には、これまで自分の思いを無条件に受け止めてもらった体験が乏しかったのではないかと筆者には感じられたのである。

攻撃的な言動が目立つ男児

T男：9歳5カ月，小学4年生。

主訴：衝動的に「死ぬ！」とわめいて，ベランダから飛び降りようとする。

家族背景：両親とT男の3人家族。会社員の父親は単身赴任で月に1回ほど週末に帰宅するだけで，母親はパートタイマーで週数日働いている。母親同伴での受診である。

発達歴および現病歴：幼児期，ひとりではしゃぐことが多く，やんちゃな子どもだった。幼稚園時代はとくに問題もなく過ごしたという。母親はT男が小学校に入学してまもなく，なんとか私立中学に入れたいとの強い思いで，早くから進学塾に通わせていた。母親の進学熱はかなり強く，毎日自宅で厳しく指導していたという。T男は母親に口先では，塾にも行きたい，私立中学にも行きたいというが，なぜか宿題をやらようとしない。母親は宿題をやらせるのが親のつとめだと思い，懸命になってやらせようとする。塾通いをめぐって，ストレスは母子ともに相当に強いものがあった。

T男は小学校に入学してからはなぜかつまんない，学校なんかなくなればよいとよく言うようになった。学校では表立って問題行動を起こすことはないが，自宅で母親と一緒にいるとよくキレル。宿題をやっているのに急に破ったり，そばにある物を手当たりしだい放り投げたりする。そうかと思うと母親にべたべたくっつくというふうで，気分の差があまりに激しいため，母親は対応に苦慮しているという。

3年時の担任教師(男性)は，前年に脳梗塞を患い，1年間ほど休職して復職したばかりであった。後遺症のせいもあったのか，情緒的にも不安定で，時折り子どもたちに暴言を吐くことから親たちの間では問題になっていた。1年生のときにもこの教師が担任だったという。学校の宿題もやらず，ただ学習塾にだけは行くというT男に対して，担任教師は，「こんなに宿題もやらないのなら進学塾などやめろ」「こんなことがわからないなら学校には来な」「インフルエンザにでも罹ればよいのに」「お前の名前は女の子のようだからだめだ」などと信じられないようなことばをT男に浴びせることもあるらしい。担任によるこのような仕打ちに対して，T男も3学期ころから母親に直接訴えるようになった。それを聞いて母親はT男に学校など行かなくてもよいとまで言うようになった。するとT男は学校には行くといつてきかない。親たちもあまりの担任の横暴な態度に対して，校長に直訴するまで

の大問題になった。その結果，やっと担任は交代となったという。

その後，T男は自宅で少しは宿題をやるようになったが，時折り唐突に紙を破ってしまうなど，衝動的な行動が目につくようになった。まるで急にスイッチが入るように人が変わり，物を投げるやら，教科書を破り捨てるなど，落ち着かず，イライラの強い状態になった。ついには学校にも行きたがらなくなって，自宅で突然ベランダに出て，「死ぬ！」と叫んで飛び降りようとするまでの騒ぎになった。このような状況になって，母親がT男を連れて当院受診となった。

面接場面での様子

大都会育ちの母親はどこか理知的な印象を与える人であった。子どもについて話し始めると，その語り口は冷静というよりもどこか冷めた感じを与え，子どもの気持ちを受け止めるゆとりなどとてもなさそうに思えた。子どもは突き放されるような感じさえ抱くのではないかと気になった。

筆者はいつものように気さくな雰囲気をつくりながら面接を進めた。しかし，こちらの期待に反して，緊張が解けて話しやすい雰囲気が生まれるかと思いきや，母親はなぜかすぐに反論めいた口調で，自分の理屈をいろいろと語り続けるのである。論争好き

な人なのか、どうも他者に対して警戒する構えが強い。もっとも印象的であったのは、筆者の一言一句にことごとく反応するほど、字義に拘泥する傾向が強いことであった。筆者もいつのまにか自分の警戒的な構えも強くなるのを感じながら面接を続けた。

きりとした顔つきで利発的な印象を与えたT男は、初対面にもかかわらず、とてもよくしゃべっていたが、物言いといい、態度といい、少々生意気な印象を受けた。よく話す子どもであったので、筆者はT男にきちんと向き合って、どうして病院に来たのか、その理由を尋ねた。すると、〈ママ！ 言っ！〉と間髪入れず母親のほうに視線を移して助けを求め、自分からは話そうとしない。それならと思い、筆者は母親のほうに向きを変え、いろいろと話し始めた途端に、今度は自分から二人の間に割って入ろうとする。筆者が「いまはお母さんと話しているんだから！」と冗談めいた調子で少し挑発するように茶々を入れると、ますますT男はしゃべり続ける。面白いほどにこちらの挑発に乗ってくる。筆者はおどけた調子で、T男の話したい気持ちを受け止め、「そうか、そうか」と相手をする一方で、それ以上はエスカレートすることはなく、まもなく母親との面接を再開することができた。

T男は椅子に座り、母親はそばのソファに座っていた。T男は口先ではなんでも平気だといわんばかりに虚勢を張っていたが、それとは裏腹にT男はソファに近づき、母親の身体の一部に手を触れて離れないようにしている。そんな仕草から、母親に対する非常に強い「甘え」のアンビバレンスを感じとれたのである。

「天の邪鬼」と「甘え」のアンビバレンス

面接でもっとも印象的であったのは、筆者がT男に相対して話を聞こうとしたら、途端に母親に助けを求めて何も語ろうとしなくなったにもかかわらず、筆者が母親と話し始めると、すぐに二人の間に割って入り、話し始めたことであった。こちらが相手に近づくと、思わず回避するが、こちらが離れようとする、途端に接近してくる。このような関係の特徴は、本連載で取り上げてきた「甘え」のアンビバレンス(図1)の特徴をよく描き出している。このような言動を見せる子どもは、わが国ではこれまで「天の邪鬼」といわれてきたもので、素直に「甘える」ことのできない子どもたちによく見受けられるものである。虚勢を張って強がっているが、母親の身体にさりげなく触れて離れようとしないうT男の振る舞いを見ていると、T男がいかにも心細く、母親を頼っているかが、筆者には痛いほど感じ取れた。しかし、このときの母親

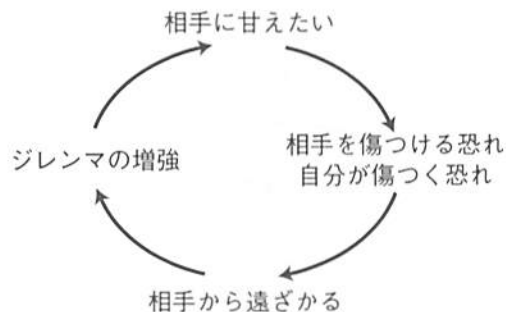


図1 甘えをめぐるアンビバレンス

にはそのようなことに気づく余裕などまったくといっていいほどなかったのである。

「天の邪鬼」と関係障碍

ここで「天の邪鬼」を取り上げたのは、このような言動をとる子どもと養育者との間には、多くの場合、関係がこじれてしまい、きちんと親子が向き合うことができない状態になっているからである。両者間に関係障碍が生まれてしまうのである。もしも早い段階で子どものちょっとした振る舞いのなかに心細い気持ちを感じ取ることができ、その気持ちにさりげなく対応することができるならば、関係障碍によってもたらされる負の循環は断ち切ることができるが、それに気づかないまま放置すれば、両者間の負の循環は肥大化の一途を辿ることになる。この母子関係はそのような負の循環によってもたらされたものだといえることができる。

関係障碍によって生まれる行動(障碍)

T男は母親に対して甘えたくても甘えられないという気持ちがとても強かった。このような「甘え」のアンビバレンスが強まってくると、しだいにフラストレーションが高まり、遂にはさまざまな行動(障碍)となって表に現れるようになる。それはなぜかといえば、甘えたい気持ちが強い一方で、甘えようとすれば自分が傷つく恐れを抱いている。したがって、甘えたい気持ちが強まると、同時に相手から離れようとする反応が思わず誘発されるようになる。つまりは、接近しようとする動きと回避しようとする動きが同時に生じることになる。このような動因のジレンマが昂じるこ

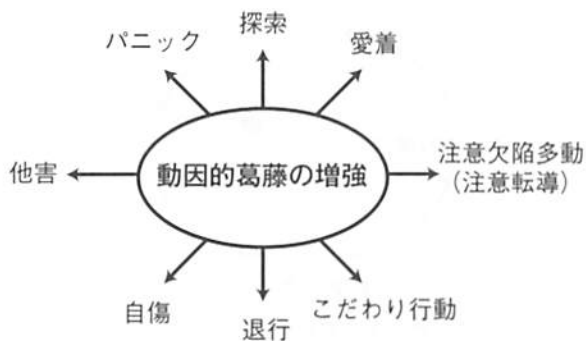


図2 動因的葛藤行動

とによって多様な行動(障碍)が起こる。筆者が(動因的)葛藤行動と称してきたものである(図2)。

行動(障碍)によって生まれる負の循環

さらに深刻な問題は、このような行動(障碍)が一旦顔を出すようになると、母子関係の悪循環はますます深刻化していくことである。子どもがみせる多様な行動(障碍)は、意図的にとった行動というよりも、いまだに甘えたいという気持ちが強いために引き起こされた行動である。つまりは背後に子どもの「甘え」の気持ちがはたらいている。しかし、相手のほうはどうしても表に現れた行動(障碍)に幻惑され、それが反社会的行動であったり、周囲を困らせる行動であったりするために、どうしてもそれを止めさせようとして、注意や叱咤を繰り返してしまう。このような反応を子どもは自分が突き放されたというふうを受け取るために、心細さが強まり、ますます甘えたい気持ちが強まる。その結果としてジレンマが増強する。こうして負の循環が促進されて関係障碍は肥大化し、事態はますます深刻化していくことになるのである(図3)。

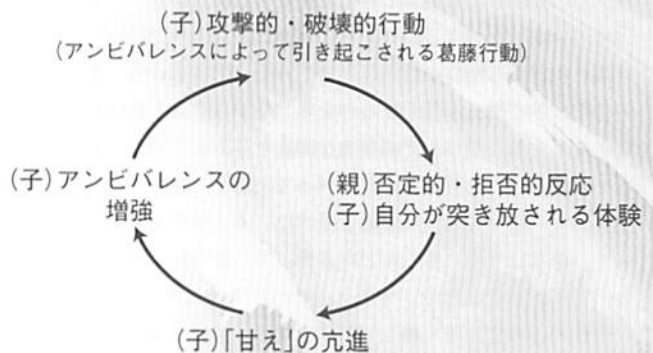


図3 行動(障碍)によってもたらされる関係の悪循環

関係の視点から子どもを理解することの大切さ

本稿で提示した2つの事例は、初回面接場面での特徴のみを示したものである。なぜ初回面接を例示したかといえば、初回で子どもを診る際に、母と子の関係の視点をもつことによって、子どもの表に現れた行動の背後にどのような気持ちかはたらいているのかを捉えやすくなると思われるからである。面接場面での子どもと面接者との二者関係の動き、あるいは子どもと面接者と母親との三者関係の動きなどに、子どもの母親に対する「甘え」をめぐる気持ちの動きが如実に表れているものなのである。それを面接者(治療者)は鋭敏に捉え、取り上げることによって、子どもは自分の気持ちを受け止めてもらったという体験をするであろうし、母親は自分に対する子どもの気持ちに気づく契機となるのである。初回面接は治療者にとっては最大の真剣勝負の場といってもよいが、そこで関係の視点をもつことによって、面接場面がより生き生きとしたものに映るようになるのではないかと思えるのである。「甘え」の問題の重要性を力説するのは、「甘え」にまつわる関係が、人が生まれて最初に体験する人間関係であり、そこでの体験の質はその後の成長過程で幾度となく顔を出し、対人関係の基本を形づくるからである。

本連載も次回で最終回となった。そこで今回は、これまでは主に子どもにみられる「甘え」の問題を取り上げてきたが、そうした問題が大人になったときにどのような形で顕在化するのかを考えてみたいと思う。